

## 63

## 橘南谿をめぐる考察

成瀬 勝俊

あそか病院外科

日本の外科黎明期においてその発展を担ったのは、腑分け、すなわち人体解剖に携わった蘭学派の医師たちであった。江戸時代においては、腑分けは、血は穢れたものであるといった一般的通念から忌諱され、幕府によっても禁じられていた。医師たちは日本に正しい医学知識を普及浸透させたいと願ったが、そのために当時のそうした政治的または社会的常識と戦わねばならなかった。中でも、1754年(宝暦4年)に京都伏見の刑場で死刑囚の腑分けを見学し、その内容を初めて解剖記録「蔵志」に残した山脇東洋、1771年(明和8年)に江戸小塚原の刑場で腑分けを見学し、後に「解体新書」を訳出した杉田玄白、前野良沢、中川淳庵の業績が嚆矢として語られることが多い。彼らはいずれも当時の動物解体業者が執刀した人体解剖を見学し、その体験を業績に生かしたが、医師自らが腑分けを執刀したケースとなると、1783年(天明3年)の京都伏見における橘南谿によるものが初めてである。

橘南谿は伊勢久居(現三重県津市)に生まれ、19歳のとき医学を志して京都に上った。京都、大阪、伏見で医師として過ごし、1781年(天明元年)、29歳のときに「痘瘡水鏡録」を出版した。その後南谿は、天明2年春から翌年夏にかけて京都以西を鹿児島まで、天明4年秋に信濃へ、天明5年秋から翌年夏にかけて北陸から東北地方までといった具合に日本中を旅して回った。その目的は、「臨床医としての見聞を広めるため」であり、各地で治療もしたとされ、後年その経験を旅行記である「西遊記」および「東遊記」にまとめた。

南谿が腑分けの執刀を行ったのは、「西遊記」と「東遊記」の間の時期に当たる1783年(天明3年)6月、31歳のときである。伏見で刑死人の解剖を執刀したもので、小石元俊の指導によるとも言われ、その所見は絵師吉村蘭洲による「平次郎臓図」として残っている。これを推進したのは、当時の伏見奉行である小堀政方である。小堀政方は近江小室藩の第6代藩主で伏見に生まれ、田沼意次時代には親田沼派として幕政にも参与し、大番頭や伏見奉行などの要職を歴任した。南谿は政方の主治医だったことから、政方の命を受けて刑死人の腑分け執刀の任に当たったと考えられる。医師である南谿が何故当時としては大旅行に当たる旅を腑分け執刀の前後に頻回に行ったか、そしてその旅費はどこから支給されたかは一つの謎であるが、主治医を勤めていた政方の命だったとするのが考えやすい。

政方の伏見奉行としての政治は強引な面もあったらしく、伏見騒動と言われる事件を引き起こした。これは1785年(天明5年)、伏見元町年寄文殊九助ら7名が、政方の政治的非道について江戸に上がって直訴したものである。文殊九助らは当時禁制だった直訴を行ったことから獄死したが、政方も、行き詰まった藩財政と自らの浪費のために不法に御用金を徴収し、その総額が11万両にも及ぶことが発覚したことから罷免された。翌年に田沼意次が失脚すると、反田沼派であった松平定信から肅清の対象とされ、1788年(天明8年)に伏見奉行在職中の不正を理由に改易されている。

一方、南谿は1786年(天明6年)、天皇の食事を調達する役所である内膳司の史生に、翌年3月、石見介に任じられ、11月には光格天皇の大嘗祭に連なった。喘息の持病があった南谿は京都東山で53歳で没したが、腑分け執刀の業績の他、医学、紀行にわたる多数の著作を残し、それにまつわるエピソードもまた多く、当時の社会情勢と合わせて考えると興味深い。個性のかつ創造的な生涯を送ったと言える。